Kappa Novels

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　蒼（あお）ざめた礼服

昭和41年7月15日　初版発行
昭和49年4月30日　101版発行

著者　松本清張（まつもとせいちょう）
東京都杉並区高井戸東1-22-3

発行者　五十嵐勝彌

印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　株式会社　光文社
振替東京115347　電話　東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（複本製本）.
表紙の模様・意匠登録　116613　© Seityō Matumoto 1966

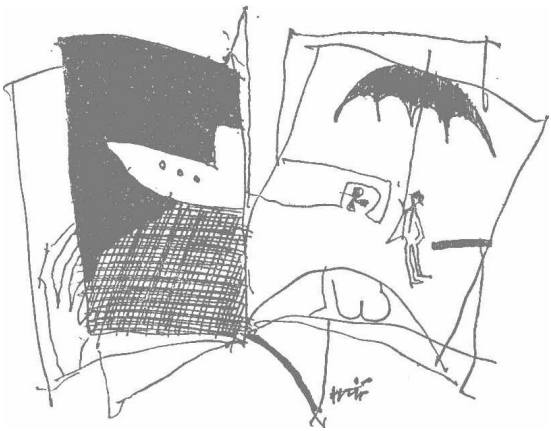
(分)0-2-93(製)03024(出)2271 (0)

蒼ざめた礼服

松本清張

カッパ・ノベルス

蒼(あお)ざめた礼服



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

本文のイラスト

山根隆

1

片山幸一は、毎日、気のりのしない生活を送っていた。

彼は、京橋にある洋傘製造会社に勤めていた。大学を出てから四年になるが、近ごろ、つくづくと今の仕事が嫌になった。彼が学校を出たころは就職難で、コネなしには一流会社はほとんど望みがなく、仕方なしに今の会社にはいったのだが、もう何とかそろそろ働き場所を変えなければならないと思っている。

第一、洋傘会社と言っても知人などに具合が悪くて、名刺を出せたものではない。洋傘という字が失笑を買いそうなのである。会社では、名刺を年に百枚ずつ作ってくれるが、彼は最初の年に作ってもらった名刺がまだ三分の二ぐらいは残っている。

それに、彼のやっている営業課の整理係というのがまたくだらない仕事だった。こんなことは女事務員でもできそうなのである。わざわざ、大学出の者が携わる仕事ではない。この洋傘会社は戦後にできたもので、当時は小さかったが、今では業界でまず二流どころであろう。そのせいか、大学卒を社員に傭って一応の体面を整える、といった見栄もあったようだ。

それならそれで優遇しそうなものだが、給料もいたって安い。それに、こういう会社の常として、内勤よりも外勤のほうを大事にする。実際、外勤のほうでは、個人的な実力の差がはっきりと出るのだ。成績のいい者は目に見えて給料が上がっているようだし、社内でも羽ぶりが利く。しかし、内勤では、どんなに一生懸命やっても個人的な成績は見えない。つまり、だれがやっても同じような仕事なのだ。

こんなくだらない仕事のために、毎朝、中央線の混雑に揉まれて京橋まで通うかと思うと、味気なくて仕方がなかった。会社の建物の前に来て、溜息が出そうだった。

片山幸一にとってたった一つの愉しみは、会社の帰りに有楽町へ回って、喫茶店でコーヒーを喫むことだった。彼は、コーヒーについては吟味するほうである。

行きつけの店は、駅裏のごみごみした路地をはいって胸を突きそうなくらい急な階段を上がったところにあ

る。そこには、女の子ひとりいるわけではなく、みすぼらしい設備で、五十ぐらいのおやじが少年相手に豆を挽いたり、パーコレーターに香りを籠もらせて黒い液体を滾らせたりしている。

片山幸一にとって、ここで、一杯のコーヒーを喫むのが、味気ない一日の生活での最後の区切りだった。独り者だし、下宿住まいだから、帰っても寒々とした部屋が待っているだけだ。会社の仕事は、つまらないなりに疲れる。いや、つまらないからよけいに疲れるといえよう。仕事に意義を感じていたら、もっと気持ちが張りつめるはずだった。二十七歳の彼は、自分自身で三十歳以上の早老の顔つきになっているような気がした。

この喫茶店は、地域的な関係からか、新聞社の連中が定連である。

片山幸一が隅っこでコーヒーを喫んでいるとき、横で雑談をしている記者たちの声が耳にはいる。彼らの話を聞いていると、怠惰で刺激のない自分の生活とはまるで違ったいきいきとした世界に感じられる。話は活気があるし、精力的だった。何よりも羨ましいのは、それぞれの個人が、自分の実力を十分に出しきって仕事をしていることだった。

洋傘会社の売上帳簿に数字を書き込んでいるのとは違い、彼らは日々の事件を追って回っている。のみならず、彼らの話のはしはしには、知名人の名前がいかにも気やすげに飛び出るのだった。政治部の記者は、高名な政客や大臣をいかにも友だち扱いにしている。学芸部の記者は、高名な作家や評論家が仲間扱いだった。有名な文化人にしても、芸能人にしても、彼らのすぐ傍に、その人物が卑俗化されて存在するのだった。

それに比べて、自分の職業はどうだろう。陰気で、退屈なのだ。洋傘が何千本何万本売れたところで、現代の日本にどんな係わりあいがあろうか。

洋傘会社は、一年中の天気予報をこしらえて、一喜一憂する。過去の降雨量を統計にして洋傘製造の基準にしている。こんなことが現代社会と何の関係があろうか。

ああ、何か、自分の才能を発揮する仕事はないものか。もっと生甲斐のある職業はないものか——。

片山幸一は、有楽町の人混みのなかを歩きながら、そう思うのだった。歩いている群衆の足どりがみんな活気を帯びているのに、自分の足だけは老人のような気がした。

ある日の夕方、片山幸一は、ラッシュ電車に揉まれて

阿佐ケ谷駅に降りた。

彼は、駅前の広い通りをとぼとぼと歩きかけた。

すると、いつもは見かけないのに、駅から百メートルばかり離れた路傍に、古本屋が本を並べていた。それは五十四、五ばかりの女だったが、乳母車みたいな屋台の上に古本を置いている。灯の道具もないとみえ、商店街から射して来る光を利用して、しょんぼりと腰掛けていた。

見ると、そのほとんどが古雑誌で、それもたいそう以前のものばかりだった。立札を見ると、十円と二十円とに分けられている。二十円のほうが少しは新しい。

今夜、寝る前に読むものがないので、何かあったら買うつもりで、彼は古雑誌を選っていた。下のほうをひっくり返していると「新世紀」という雑誌が眼に触れた。今はもう廃れた雑誌だが、終戦後には、総合雑誌として一部にファンをもっていたものである。

彼は目次を開いて見た。やはり古い記事ばかりで、読めそうなものはなかったが、ふと、「初のチベット潜入記」という読物が眼に止まった。明治のころ、ラマ僧に化けて、この秘境にはいって行った河口慧海という坊さんの紀行を物語風に縮めたものだった。

まあ、こんなものでも今夜は読んでみようと、彼はその雑誌を買った。

片山幸一は下宿に帰った。

借りている家は、植木屋と庭師をかねている。主人は六十ばかりだが、まだ印半纏を着て外を回っていた。彼の部屋はその家の裏二階で、六畳一間だった。

下宿のおばさんが出す侘しい晩飯を食べ終わると、あとはすることもなかった。

片山幸一は、いま買って来たばかりの古雑誌を畳の上に腹這って読みだした。雑誌の紙の間にまだ埃が残っていた。

目次を眺めたが、どれもつまらない記事だった。昭和二十四年だから記事も古くさい。

彼は、ちょっと心が動いた〝チベット探検記〟を読み始めた。明治のころの一種の秘境物語だが、読んでみてわりとおもしろかった。

しかし、それを読み上げるのに三十分とかからなかった。坊さんが雪のヒマラヤ越えをする辺りが、少しおもしろかっただけである。読み終わると、彼はその雑誌を押入れの隅に放り投げた。そして寝返りをして肱枕をした。

すすけた天井を眺めていると、よけいに虚無感がひろがってくる。こんな生活は何とかしなくてはならない。今のうちにしないと、ずるずる年齢を食ってしまうような気がする。

といって、東京では頼みになる友人もいないし、有望な会社にはいる手蔓もない。

やはり、これは機会を待つほかはない。それまでの辛抱だと、自分を慰めているうち、いつのまにか眠ってしまった。

片山幸一は出勤するとき、その朝発売されたばかりの週刊誌を駅で買った。

ラッシュの電車の中で真ん中あたりに立つと、周囲に包み込まれて、かえって安定した姿勢で、週刊誌一冊分を終点まで読める。

その朝も、呼びもの記事にざっと眼を通したあと、次のページに出てきた「告知板」というのを何気なく読んでいた。

この週刊誌は、知名の人が求めているものを文章にしてこの欄で一括して載せている。それには、欲しい書物だとか、犬の交換だとか、女中さんの雇い入れだとかが載っている。

片山幸一は、随筆家の関口貞雄氏の書いた短文にぼんやり目を落としているうち、おや、と思った。

「昭和二十四年十月号の『新世紀』をお持ちの方は、至急、ぜひ、お譲りください。高価なお値段で申し受けます。もし、保存のためにお譲り願えない場合は、拝借するだけで結構です。この分にも相当のお礼をさし上げたいと思います」

片山幸一は、これが眼に止まったとき、自分の押入れに拋り込んである「新世紀」を思い出した。

あれは確かに昭和二十四年だったが、十月号だったかどうか憶えていない。あの雑誌の中には、たしか、年末を当て込んだ記事が出ていたはずだから、あるいはそれではないかと思う。

随筆家というのは、いろいろな本が必要らしい。片山幸一にとって少しもおもしろくなかったその古雑誌も、関口貞雄氏には大事な資料だったのかもしれない。

文筆専門の人だから、出入りの古本屋などに手を回して捜したに違いないのだが、ついになかったものと見える。

片山幸一は、家に帰って、それが「新世紀」の十月号

だったら、関口氏に贈ってもいいと思った。

会社に出て、例の退屈な仕事を一日中やり、その帰途、あの貧弱な喫茶店に寄って、コーヒーを啜って下宿に帰ると、彼はすぐに押入れから「新世紀」を取り出した。まさに二十四年の十月号だった。関口貞雄氏の求めている雑誌である。

いったい、どういう記事を関口氏は読みたいのだろうか。

片山幸一は、もう一度、目次面をざっと拾い読みしたが、どれも古臭い記事で、十年以上の過去になったものばかりである。昭和二十四年というと、当時の社会世相はわかるが、それとても、相当な金を出してまで随筆家が欲しがる資料は見当たらなかった。

まさか、片山幸一が興味を起こしたように、随筆家も〝初のチベット潜入記〟を読みたいつもりではなかろう。

週刊誌の「告知板」を読んだとき、すぐにでも送って上げようと思ったが、雑誌を改めて見て自分に興味がないものだから、つい、それなりにしてしまった。相当な金で買うといっても、もともと、こんな雑誌だから、四百円か五百円であろう。週刊誌の編集部に宛ててハガキを出すのも、古雑誌を送る手間も面倒臭くなってしまった。

さらに、それから二週間ぐらい経った。彼は「新世紀」などという雑誌のことは疾に忘れてしまっていた。

すると、やはり朝の電車の中である。彼は駅で買った同じ週刊誌を開いた。

ページを繰っているうちに「告知板」に眼が触れた。相変わらず、諸名士の求める文章が並んでいた。その下に、一般の投書欄がある。これは、お捜しの書物は持っているとか、犬の交換に応じますといった類のもので、一般からの回答である。この雑誌は、回答を直接に先方に届けないで、雑誌面を仲介するようにできている。

片山幸一がその回答欄を見ていると、先日の随筆家関口貞雄氏への回答投書が載っていた。

「関口貞雄氏へ。――お捜しの『新世紀』十月号は、当方所持しております。お譲りして結構です。ご連絡ください。（東京都中野区江古田××番地　野崎精三郎）」

ははあ、やはり同じ雑誌を持っている人があったとみえる、片山幸一は思った。

彼はハガキを書く面倒を考えたばかりに四百円か五百円か損したことになる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

片山幸一は、他人に先を越されたときの、かすかないまいましさをちょっと感じた。

ところが、その翌々朝だった。

会社に出る前に、寝床で朝刊を読んでいると、城西地区の出来事を集めた「城西版」にある一つの小さな記事が眼についた。

「昨一月二十五日午後十一時ごろ、中野区江古田××番地、会社員野崎精三郎さん（二八）方へ泥棒がはいり、室内を物色した挙句、金側腕時計一個（時価七千円）を奪って逃げたと、野崎さんから所轄署に届出があった」

片山幸一は、何気なくこれを読んだときはてなと思った。どうも、この名前はどこかで見たような気がする。が、そのうち、思い出した。被害者野崎精三郎というのは、随筆家関口貞雄氏に古雑誌の「新世紀」の譲渡方を申し出た人だ。週刊誌の「告知板」で読んだ名前なのである。

2

しかし、片山幸一はそんな小さな出来事などは忘れてしまっていた。

彼は、相変わらず朝晩の国電の混雑に揉まれて、京橋の洋傘会社に通っていた。

ところが、あの記事が出てから十日目くらいだった。その朝、彼はいつものように駅で週刊誌を買った。何気なくページを繰っていると、例の「告知板」のところが出た。ここでは求める側の人物は写真入りで出たりなどする。

片山幸一が、おや、と思ったのは、そこに随筆家の関口貞雄氏が、また一文を載せていることだった。しかも、その内容はこの前とまったく同じなのである。

「昭和二十四年十月号の『新世紀』をお持ちの方は、至急、ぜひ、お譲りください。高価なお値段で申し受けます。もし、保存のためにお譲り願えない場合は、拝借するだけで結構です。この分にも相当のお礼をさ

し上げたいと思います」

片山幸一は、最初、この週刊誌の編集部がうっかり間違えて、前の組版のまま二重に掲載したのかと思った。以前に読んだのと一字一句違わないように思える。

だが、あれには、その雑誌の所持者が回答していたから、彼はますます何かの手違いで二重に掲載されたのだと考えた。

しかし、彼はやがてその記事が間違って二重に出たのではないことに気づいた。出版社には校正部があるから、まさか、そんな迂闊な間違いを犯すはずがない、つまり、関口氏はその雑誌をまだ手に入れてないのである。

次の週刊誌に回答した何とかいう名前の人は、その持っていた「新世紀」を関口氏に送らなかったのだろうか。それはどういう理由かわからない。値段の点が折り合わないのか、それとも、何かの手違いで実現しなかったのか、とにかく、雑誌は関口氏の手に届かなかったのだ。

だから、関口氏はもう一度この週刊誌にこの広告を出したというわけであろう。

片山幸一は、随筆家がそんなに欲しがる雑誌なら、自分が侘しい夜店で買ったあの「新世紀」を、氏に送ってやろうかと思った。前に回答の投書を読んだとき、ちょっと先を越されたと、いまいましさを感じたくらいだから、今度は面倒がらずに、週刊誌の編集部宛に通知を書くことにした。

どうせ、謝礼は四百円か五百円くらいだろうが、関口氏の熱望を満たしてやりたかった。

片山幸一は、会社の昼休みに、その投書のハガキを書き出した。

「お捜しの雑誌は、小生が所持しておりますのでお送り申し上げます」

こんな簡単な文句を書いて、表に雑誌社の宛名を書きかけた。が、その途中、彼は、にわかにペンを止めた。

——待てよ。あの投書者は、たしか野崎という名前だったが、その人は新聞記事で読んだところによると泥棒に見舞われている。時価七千円の金側腕時計を盗まれたとあったが、果たして盗難はそれだけだったのだろうか。

この考えが、彼の頭にふと泛んだのである。

週刊誌に関口氏宛の回答を投書したくらいだから、野崎某はその雑誌「新世紀」を氏宛に送るつもりだったの

だ。むろん、彼とて随筆家から多額の謝礼を期待したのではあるまい。だから、値段が合わないために、その譲渡が中止になったとは考えられない。つまり、思わぬ事故が野崎某に起きたのだ。

その事故とは何か。

それがすなわち盗難事件であろう。新聞には、金側時計一個とのみ書かれてあったが、そのとき、雑誌「新世紀」も一緒に盗まれたのではなかろうか。そのため、もう一度、随筆家関口貞雄氏の同じ文章が週刊誌に出たのだろう。

新聞記事は、古雑誌一冊など盗まれても問題でないから、ただ金側腕時計だけを載せたのである。いや、きっと、それに違いない。

片山幸一は考えた。

では、あの泥棒はなぜその雑誌を奪って行ったのか。

もしかすると、その泥棒は読書家で、眼にふれたその雑誌をついでにポケットに捩じ込んだのかもしれない。

しかし、そうでない考え方もあるのだ。つまり、これを逆に考えて、古雑誌が盗みの主体で、金側腕時計が従という場合だ。奇妙な想像だが、当人だけに大事な雑誌で、それを盗るのを目的にしてはいったことだ。雑誌一冊の窃盗ではちょっと困るから、普通の泥棒のように、たまたまそこに置いてあった腕時計も盗って遁げたのではなかろうか。

だが、これは少々奇抜すぎる考え方のようでもあった。

第一、彼があの「告知板」を読んだときに、何がそれほど随筆家の興味をひいたのかと思って、「新世紀」の目次を見たのだが、それらしいものは見当たらなかった。

みんなつまらない記事ばかりで、少なくとも随筆家が大事がるような文章は載っていなかった。

しかし、また一方では、第三者にはつまらないが、当人にとってはひどく重要なという場合がしばしばある。昭和二十四年十月号の「新世紀」には、他人には無価値でも、随筆家関口貞雄氏にとっては大事な記事があったのかもしれぬ。

片山幸一は、こう考えると、せっかく書きかけた週刊誌の編集部宛の投書を細かく裂いた。

その晩、彼は下宿に帰ると、机の上に雑多に置かれた雑誌類の下から、週刊誌を取り出し、この前の「告知板」に載った投書者の名前を確かめた。

東京都中野区江古田××番地　野崎精三郎。

片山幸一は、バスを哲学堂の前で降りた。ここは、ちょっとした公園になっている。区分地図を見ると、野崎精三郎の番地は、この公園の裏通りにあった。近くには、写真材料の製造会社がある。

まだ朝の七時過ぎだった。この早い時間を選んだのは、自分の勤務の都合もあったが、新聞記事によると、相手が会社員とあるので、出勤前を狙ったのである。朝の斜めの光線のなかで、勤め人らしい人たちが細い道を急ぎ脚に歩いていた。

しばらく行くと道が二つに岐れているので、迷い、眼についた八百屋で訊くと、野崎氏宅は、ちょうどその裏通りに当たっていた。

八百屋で教えられた目印を頼りにさらに捜して行くと、三十ぐらいの男が道端にドテラを着て、懐ろ手をして立っていた。

「この近くに」

と片山幸一はその男に近づいて訊いた。

「野崎精三郎さんという方の家はありませんか？」

男は無精髭を生やした顎を急に片山に向けた。

「野崎ならぼくですが」

男は怪訝そうに彼を見た。

「あ、これは」

片山幸一は、あわてて愛想笑いをして頭を下げた。

「どうも。わたしは片山というものですが、実はちょっと野崎さんにお訊ねしたいことがあってあがったんですが」

「どんなことでしょう？」

野崎精三郎は、見ず知らずの片山にいきなり言われたので、不思議そうな顔をした。

そのドテラはかなり垢じみている。裾からのぞいたズボン下の脚は、女もののサンダルをつっかけていた。

「つかぬことを伺います。ほかでもありませんが、あなたは週刊誌に、随筆家の関口さんに、『新世紀』という古い雑誌を、お譲りになるよう投書しておられましたね？」

すると、野崎精三郎はますます妙な表情をした。

「はあ、そのとおりですが」

「それについてお訊ねしたいんです。今週の週刊誌を見ると、また関口さんの同じ文句が載っているのです。つまり、『新世紀』の二十四年十月号が欲しいというあれ

なんですが、野崎さんは、その雑誌を関口さんにお譲りになったのではないんですか？」
「失礼ですが」
と野崎精三郎は訊き返した。
「あなたは、どういう方なんですか？」
「失礼しました。わたしは、銀座のほうの会社に勤めている片山幸一と申しますが。実は、ぼくも偶然に同じ古雑誌を持っていたんですよ。あの関口さんの文章が出た週の次か次の週に、あなたの回答文が載っていたので、やはり同じ雑誌を持っている人もあるのかと思って拝見してたんです。すると、ふたたび関口さんがあれをお出しになったでしょう。あなたがお送りになったはずなのに妙だと思って、実は、そう言ってはなんですが、好奇心からお訊ねにあがったようなしだいです」
「そうですか」
野崎精三郎は、表情を柔らげた。
「実は、あれは関口さんにお送りする前に、いや、ちょうど、前日に、失くなったのですよ」
「失くなった？　それはどういう理由ですか？」
野崎精三郎は、返事をちょいと迷っているようなふうだった。
「あれを関口さんに送ろうと思ったその矢先に盗難に遭ったんですよ」
やっぱりそうだったのか、片山幸一は心の中でうなずいた。
「ほう、盗難とおっしゃいますが、あの雑誌だけを泥棒は持って行ったのですか？」
彼はわざと知らぬ顔で訊いた。
「いいえ、そうじゃありません。盗られたのは、もちろん、金になる物です。つまり、金側の腕時計ですよ。こいつを持って行かれました」
「ははあ。その泥棒は、あなたが睡っていらっしゃるときにはいったのですか？」
「ええ、睡ってる間です。わたしも、家内も、何も覚えていないんですよ。腕時計は枕もとに置いておきましたがね。そいつを盗んで行くんだから、よほど大胆な盗賊です。もっとも、うっかり眼を醒ましたら、どんな怪我をさせられたかもわからない、と言って慰めてくれる者もありますがね」
「なるほど。あるいはそうかもしれませんね。で、なんですか、盗られたのは、腕時計一個と、古雑誌だけですか？　どうも、この取り合わせが妙だと思いますが」

「いや。そのほかに、ライターも盗まれましたがね。こいつはバーで貰ったものですから、ちっとも値打ちはないんです。金側時計はわかるとしても、なぜ、つまらないライターや古雑誌を持って行ったのか、泥棒の気持ちが判じかねますよ。おおかた、そのライターで煙草を吸いながら本を読もうという、洒落っ気のある泥棒かもしれません」

「で、関口さんのほうには、そういう事情をお知らせになりましたか？」

「いいえ。知らせる前に、本人がここにやって来ましたよ」

「えっ、あの関口さんがお宅に見えたのですか？」

「そうなんです。実は、わたしの盗難事件は新聞に出ましてね。小さい記事でしたが、それを関口さんは読んだらしいんです。その新聞が出た、すぐその晩でしたが、わたしを訪ねて来られて、『新世紀』は盗難に遭ったのですか、とお訊きになりました」

「なに、それを関口さんから先に訊いたのですか？」

「そうなんです。ほかのことは言いませんでした。一番にそれを訊きましたよ。よほど、あの雑誌が頭にあったとみえますね」

「あなたがそれを説明すると、関口さんは何と言ってました？」

「泥棒のことを、いやに根掘り葉掘り訊いていましたよ。でも、わたしはすっかり寝込んでいて何も知らないんですからね。くわしいことは警察に行って訊いてください、と言うと、口の中で何かぶつぶつ言いながら帰って行かれました。そんな具合で、関口さんはあの古雑誌が手にはいらなくなったので、もう一度、週刊誌に同じ広告を出したのでしょう。あなたがお持ちだったら、関口さんに知らせて上げたらどうです。きっと、大喜びするに違いありませんよ」

その晩、片山幸一は「新世紀」を出して目次面を検討した。これで何回目かだった。

×東京裁判の歴史的反省。
×昭電・造船両疑獄の性格。
×政治資金の脱け道。
×マッカーサー元帥物語。
×反ファッショ思想と知識階級。
×戦後文学の新しい諸問題。
×新世代の新人物論。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb